

(4) ASD リスクがある幼児の家族への支援

—TEACCH の FITT プログラムを参考に—

川崎医療福祉大学医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程

○松田 紗代

川崎医療福祉大学医療福祉学部医療福祉学科

諏訪 利明, 小田桐早苗, 下田 茜

【目的】

自閉スペクトラム症(ASD)児への家族支援プログラム(FITT)を参考にした実践を, ASDリスク児と家族に対して行う。FITT実施前後で家族にどのような変化が起きているかを捉え, 家族が共同治療者となるための有効な取り組みについて考察する。

【方法】

対象児は, 乳幼児期自閉症チェックリストの結果「ASDリスク児」に該当した4歳未満の乳幼児で, 対象者はその母親である(2家族)。対象児者の自宅にて全24回の介入プログラムを行い, 介入前後の評価とセッション中の発言から, 対象者が共同治療者となるきっかけにつながる変化を分析した。

【結果】

インタビューを比較すると, 両者共に, 介入による子の成長の手応えと, 親が実施する効果の実感を語った。A母はうまくいっている実感でとどまっているが, B母は悩みはありながら自分でもやっていると語った。

【考察】

家族が共同治療者となるための有効な取り組みの1つは, 家庭訪問で介入を行うことである。具体的な助言や介入ができ, 親に参加を促すことで, 取り組みへの抵抗感を減らし, ASD特性の般化の困難さの解消にも繋がった。もう1つは, 親コーチングによる効果である。親は学んだことを日常的に取り組み, 成果の手ごたえを感じていた。FITTを参考にしたプログラムには, 家族が共同治療者となることの重要な要素が含まれていたことの効果だと考えられた。

セッション中の発言では, 両者共に「子どもの成長の実感」「普段の家庭生活での実践の手応え」が影響していたようだった。しかし, PSIやSWLSの数値の変化は両者に違いがあった。これは, 子の知的発達の違い, 家族の協力の有無, 子からの親の関わりに対するフィードバックの有無による可能性が示唆された。